

令和2年度胃がん直接施設検診成績

胃X線フィルム読影委員会 委員長 関 裕 史

令和2年度の新潟市胃がん検診の結果を報告する。

1. 胃がん検診の総受診者数・カバー率の推移 (表1)

カバー率は、前年度9.7%から本年度7.3%へと減少した。新型コロナウイルス感染症流行による受診者の減少が影響していると思われる。なお、令和1年度から内視鏡検診が2年に1回の受診となっている。

2. 胃直接施設検診の成績

1) 施設検診の年齢層別成績 (表2、図1)

総受診者数は11,667例で、60歳以上が79.3% (9,257/11,667) である。60歳以上の比率は前年86.3%より低下した。

X線直接検診受診者数は、前年度に比べ304例 (2.5%) 減少した。50歳以上の各年齢層で前年度より減少となった。要内視鏡率は4.9% (567/11,667)、内視鏡受診率は83.8% (475/567)

であった。前年度に比べ、要内視鏡例の内視鏡受診率は横ばいであった。

内視鏡による精密検査結果は、発見胃がん17例、0.15%で、早期がん13例、早期がん率76.5% (13/17) であった。発見胃がん率は、前年度0.22%からやや低下した。早期がん率は、前年の令和1年度84.0%からは低下しているが、平成30年度79.4%、平成29年度67.9%からはほぼ横ばいである。その他は、ポリープ44例、消化性潰瘍71例、腺腫3例、粘膜下腫瘍34例、十二指腸ポリープ4例、食道癌5例、異常なし245例であった。

2) 年齢層別の発見胃がん (表3)

60歳以上の症例を5年きぎみの年齢層別に発見胃がんを集計した。胃がん発見率は、60~64歳0.08%、65~69歳0.08%、70~74歳0.21%、75~79歳0.27%、80~84歳0.14%、85歳以上0.70%であった。発見率は70歳以上の高齢層で高率となった。

表1 新潟市の胃がん検診総受診者数とカバー率の推移

年度	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
対象者	297,830	298,732	300,561	300,027	300,433	301,021	494,808	496,477
集団検診	12,458	11,814	11,351	10,348	9,783	9,214	8,600	3,768
直接施設検診	13,687	13,386	13,518	12,920	12,322	11,890	11,971	11,667
内視鏡検診	43,274	44,281	43,581	45,089	44,097	43,499	27,615	20,657
合計	69,419	69,481	68,450	68,357	66,202	64,603	48,186	36,092
カバー率	23.3%	23.3%	22.8%	22.8%	22.0%	21.5%	9.7%	7.3%

※R1年度から対象者を全国に合わせ全住民 (40歳以上) に変更

※R1年度から内視鏡検診対象者は偶数年齢のみ

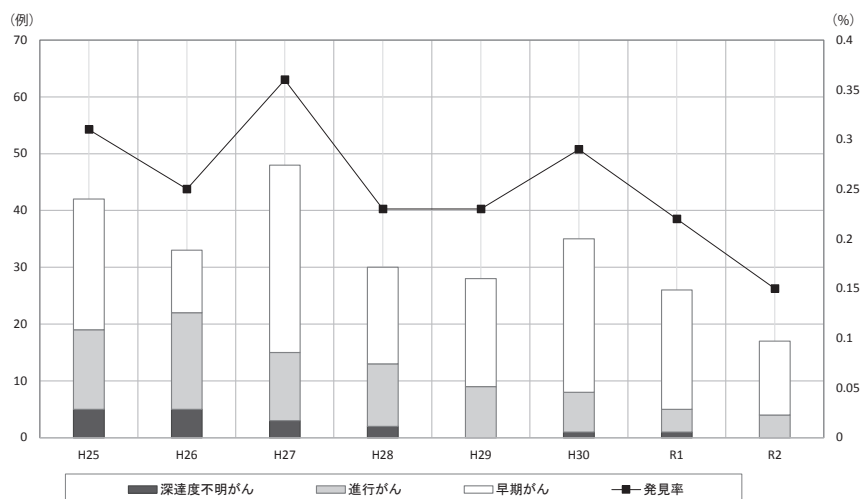


図1 胃施設検診発見胃がんの推移

表3 年齢層別発見胃がん

区分	受診者数	要内視鏡数	内視鏡受診数		発見胃がん					
					進行	早期	不明	計	発見率	早期がん率
60～64歳	1,329	70	59	84.3%		1		1	0.08%	100.0%
65～69歳	2,609	142	115	81.0%	1	1		2	0.08%	50.0%
70～74歳	2,858	153	123	80.4%		6		6	0.21%	100.0%
75～79歳	1,458	87	74	85.1%	2	2		4	0.27%	50.0%
80～84歳	719	25	24	96.0%		1		1	0.14%	100.0%
85歳以上	284	14	12	85.7%	1	1		2	0.70%	50.0%

表4 初回受診者数の推移

	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度
受診者数	13,687	13,386	13,518	12,920	12,322	11,890	11,971	11,667
初回受診者数	2,616	2,552	2,711	2,847	2,750	2,614	2,404	2,777
	19.1%	19.1%	20.1%	22.0%	22.3%	22.0%	20.1%	23.8%

3) 初回受診者数の推移 (表4)

胃X線施設検診初回受診者数は2,777例、全受診者比は23.8%で、やや増加した。

年連続受診群では低かった。早期がん率は、2年連続受診群、隔年群で高く、3年連続受診群で低かった。特定の傾向はみられない。

4) 初回・再診別成績 (表5)

初回受診者群の胃がん発見率は0.22%、再診者群では0.12%であった。早期がん率は、初回受診者群66.7%、再診者群81.8%であった。

6) 発見胃がんの最終検診歴と検診方法 (表7)

発見胃がん例の最終検診歴を見ると、初回群6例、1年前群5例、2年前群6例、3年前群0例であった。1年前群の最終検診方法は直接X線5例、2年前群では直接X線6例であった。

5) 受診形式と発見率 (表6)

胃がん発見率は、不定期群、隔年群、初回群で高く、3年連続受診群、4年連続受診群、2

7) 偽陰性例・前年検診受診症例の検討 (表8)

久道の定義による偽陰性例、すなわち、発見

表5 初回・再診別成績

	受診者数 (A)	要内視鏡 (B)	内視鏡受診者 (C)	発見胃がん			
				総数(D)	進行	早期	深達度不明
初回	2,777	163 (B/A) 5.9%	136 (C/B) 83.4%	6 (D/A) 0.22%	2	4 66.7%	
再診	8,890	404 (B/A) 4.5%	339 (C/B) 83.9%	11 (D/A) 0.12%	2	9 81.8%	
合計	11,667	567 (B/A) 4.9%	475 (C/B) 83.8%	17 (D/A) 0.15%	4	13 76.5%	0

表6 受診形式と発見率

	なし(初回)		2年連続		3年連続		4年連続		隔年		不定期	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
進行がん	2							1				1
早期がん	4		1				3		1	2	2	
深達度不明がん												
がん/受診者数	6/1,108	0/1,669	1/459	0/536	0/502	0/512	3/2,517	1/2,454	1/449	2/615	2/346	1/500
発見率	0.54%		0.22%				0.12%	0.04%	0.22%	0.33%	0.58%	0.20%
がん/受診者数	6/2,777		1/995		0/1,014		4/4,971		3/1,064		3/846	
発見率	0.22%		0.10%				0.08%		0.28%		0.35%	
早期がん率	66.7%		100.0%				75.0%		100.0%		66.7%	

*初回は3年以上受診歴なし

表7 発見胃がんの最終検診歴と検診方法

	なし(初回)	1年前(元年度)			2年前(30年度)			3年前(29年度)		
		直接	内視鏡	間接	直接	内視鏡	間接	直接	内視鏡	間接
進行がん	2	1			1					
早期がん	4	4			5					
深達度不明がん										
計	6	5			6			0		

表8 偽陰性

	前年受診	前回検診のダブルチェック状況		前年検診の結果				症例検討会	示現		
		ダブルチェック	シングルチェック	異常なし	有所見 精検不要	要精検	要治療		+	-	±
進行がん	1	1		1				1	1		
早期がん	4	4		2	2			4	4		
深達度不明がん											
計	5	5	0	3	2	0	0	5	1	4	

胃がんのうち前年受診時に異常を指摘されなかった5例についてみると、内訳は、進行がん1例、早期がん4例、深達度不明がん0例であった。前年検診時、全例ダブルチェックされていた。

この5例のうち5例が胃がんフィルム検討会でretrospectiveに検討された。この中で、振り返って前年度のフィルム上で病変を指摘できた症例が1例、20%にみられ、発見時には進行が

んであった。前年度の画像では病変を明確には指摘できなかった症例が4例、80%にみられ、発見時は全例早期がんであった。

8) 読影形式別成績(表9)

シングルチェック機関の64例のうち、要内視鏡は0例、0%で、内視鏡受診は0例、0%、ダブルチェック機関の11,603例のうち、要内視鏡は567例、4.9%で、内視鏡受診は475例、

表9 読影形式別成績

	受診者数 (A)	要内視鏡数 (B)	内視鏡受診者 (C)	発 見 胃 が ん						
				総数 (D)	進 行	早 期	深達度 不明がん	発見率 (D/A)	早期 がん率	対内視鏡 受診者の 発見率 (D/C)
シングル チェック 機 関 (2)	64 (0.5%)	0 (B/A) 0.0%	0 (C/B) 0.0%	0				0.00%	0.00%	0.00%
ダブル チェック 機 関 (77)	11,603 (99.5%)	567 (B/A) 4.9%	475 (C/B) 83.8%	17*1	4	13*1		0.15%	76.5%	3.58%
計 (79機関)	11,667	567	475	17	4	13	0	0.15%	76.5%	3.58%

*至急病院に紹介したシングルチェックを含む

表10 ダブルチェック発見胃がんの内容

(シングルチェック1件を除く)

	件 数	主治医－精検不要 検討委員会－要内視鏡	両方とも 要内視鏡	主治医－要内視鏡 検討委員会－精検不要
進行がん	4		4	
早期がん	12	3	7	2
深達度不明がん	0			
計	16	3	11	2

83.8%であった。

シングルチェック機関では発見胃がんはなかった。ダブルチェック機関では17例、0.15%に胃がんが発見され、早期がん率は76.5%だった。対内視鏡受診者の発見率は、ダブルチェック機関では3.58%であった。ダブルチェック機関での発見胃がんの中には、X線検査で明らかに悪性病変が認められ、ダブルチェックを経ずに病院に紹介した症例が1例含まれている。

シングルチェック症例は前年度よりも少数で、ダブルチェック症例が全例の99.5%と大半を占めている。

9) ダブルチェック発見胃がんの内容 (表10)

主治医が異常なしと判定したがダブルチェックにより拾い上げられた胃がんが3例、18.8% (3/16) にみられ、早期がんが3例であった。ダブルチェックの有用性が示唆される結果である。

3. まとめ

- 1) 胃がん検診のカバー率は7.3%で、前年度より減少した。
- 2) 胃直接施設検診における総受診者数は

11,667例で、50歳以上の各年齢層で前年度より減少となった。要内視鏡例の内視鏡受診率は83.8%と前年度とほぼ同等。発見胃がんは17例、0.15%で前年度からはやや低下した。早期がん率は76.5%と前年度より低下したが、平成30年度、平成29年度からはほぼ横ばいである。

- 3) 年齢層別の発見胃がん率は、70歳以上の高齢層で高率となった。
- 4) 検診発見胃がんのうちretrospectiveに検討を行った5例において、振り返って前年度のフィルム上で病変を指摘できた症例が1例、20%、病変を明確には指摘できなかった症例が4例、80%にみられた。
- 5) ダブルチェック読影形式が浸透し、症例数割合で99.5%である。施設検診発見胃がん17例のすべてがダブルチェックで拾い上げられた症例で、ダブルチェックによる早期がん率は76.5%である。また、主治医が異常なしと判定したがダブルチェックにより発見された発見胃がんが3例、18.8% (3/16) にみられた。ダブルチェックの有用性が示されている。